

わたしの生の証言

蕭 乾 著
Xiao Qian

顧偉良 訳
Gu Weiliang

【訳者解説】

ここに訳出された文章は、中国の作家蕭乾（しょうけん）が一九五〇年に書き記したものである。原文是北京中央文史館に保管されており、これまでに公表されることがなかった。原題は「自伝」となっているが、「わたしの生の証言」は、訳者がつけた題名である。これは決して恣意的な題名ではない。後に触れることになるが、この「自伝」は、作者の本意によるものではなく、建国直後に行われた思想改造運動で強制的に書かせられた「自己批判文」なのである。従って、「自伝」というよりも、寧ろ「わたしの生の証言」として蕭乾の文学生涯に位置づけて考えると、その意義が遥かに大きい。その意味で、題名「わたしの生の証言」は、恐らくこの文章の性格に合っているかも知れない。通常、自伝と言えば、作家の自伝作品を指すのが一般的であるが、毛沢東時代に行われた思想改造という前代未聞の政治的事情で考えれば、あえて「思想調書」と呼んでも差し支えはない。実際、波乱万丈の蕭乾の文学生涯は、過去を如実に語ってくれた。

この自伝資料は、原稿用紙（四百字詰）三十四枚となっている。蕭乾自身は、回想録『地図を持たない旅人』の冒頭で「自伝」について簡単に触れた程度で、その経緯については触れていない。「自伝」と名づけられたこの文章は、九つの項目になっている。すなわち、〈一〉「家庭出身」、〈二〉「少年先鋒隊」（一九二五～二六）、〈三〉「北新書局——北伐」（一九二六～二八）、〈四〉「汕頭——輔仁大学」（一九二九～三二）、〈五〉「福州——燕京大学卒業」（一九三二～三五）、〈六〉「大公報入社」（一九三五～三九）、〈七〉「イギリス七年間」（一九三九～四六）、〈八〉「帰国——香港より北京

へ」（一九四六～四九）、〈九〉「組織参加要望」。一応、年代を追って書かれているが、その中で、作者自身は思想改造として、己に対して否定と肯定とを規定する自己点検を行っている。

中国現代文学研究が直面している最大の問題の一つは、多くの文献が解禁されていないことである。その多くは現代中国政治に絡んでいる。なぜなら、中国現代文学史は、毛沢東時代に於ける政治運動と切っても切れない関係にあったからである。その意味で、蕭乾の書き記した「自伝」は、蕭乾を知る上で第一級の資料である。無論、蕭乾研究にとって重要な文献であるに違いない。

蕭乾は、漢化したモンゴル族の貧しい家庭に生まれた。父は北京城門の番人で、蕭乾が生まれる一か月前に亡くなる。母親に育てられた蕭乾は、十一歳の時母が亡くなる。その後、叔父の助けにより勉強が続けられた。中学や高校の時代に蕭乾は、アルバイトをしながら自給生活を維持し、そして苦学して大学に入った。一九三三年（23歳）、北京の輔仁大学英文科より燕京大学新聞学院に転入。当時、燕京大学で教鞭を取った国際的なジャーナリスト、エドガー・スノーと出会った。この出会いは、蕭乾の文学生涯に大きな影響を与えた。燕京大学在学中、楊剛女史⁽¹⁾と共に、現代中国短篇小説選『活きた中国』（“Living China”, エドガー・スノー編訳）の編集を手伝う。この年、初めての短編小説『蚕』を、『大公報・文芸欄』（沈從文主宰）に発表。一九三五年七月、燕京大学卒業後、『大公報』社（天津）に入社。大公報文芸欄「小公園」（のち「文芸」と改称）編集担当。作家として創作活動がスタートした。日中戦争勃発後、大公報社を失職、雲南などを転々とする。その後香港へ渡る。一九三九年夏、

渡英。ロンドン大学東方学院を経て、作家エドワード・モーガン・フォースターなどの推薦で、ケンブリッジ大学キングス・カレッジに入学、イギリス心理小説を研究。それ以降、作家E.M.フォースターとの交友関係が結ばれた。

一九四九年、ケンブリッジ大学キングス・カレッジ中国文学科主任キュスターヴ・ハルーン教授が、香港九龍の花墟道にある蕭乾の家を訪れ、蕭乾に現代中国文学の講義を受け持つよう招請した。大学側より家族全員の旅費を負担し、終身教授のポストも約束された。蕭乾は、この招聘はE.M.フォースターの好意によるものと推察したが、彼は色々と考えたあげく、招聘をきっぱりと断り、家族と共に「華安丸」に乗って建国前夜の北京へ戻った。五十年代初頭、E.M.フォースターから一度自ら書いた手紙をイギリス訪中団のメンバーに託して、北京にいる蕭乾に渡してもらおうとしたが、歓迎レセプションに出席した蕭乾は、その手紙を受け取る勇気すらなかった。E.M.フォースターとの文学上の友情が悲劇で終わったため、蕭乾は終生癒されない痛手を負った。

イギリス滞在の間、蕭乾は自由な学問の雰囲気に含まれる中で学んだ。「自伝」の中にも触れているが、文学に関しては、ブルームズベリー・グループの作家たちとの交流（E.M.フォースター、ヴァージニア・ウルフ等）をしていた。渡英前には文芸理論上では、当時流行っていた直覚派理論から影響を受けていた。思想に関しては、ケンブリッジ大学に於けるハロルド・ラスキの講義で、ラスキの政治思想の根幹となる自由思想に影響を受けた。その自由思想が蕭乾の思想信念における「中間路線」⁽²⁾の礎ともなった。しかし、ケンブリッジ大学で学んだ自由思想は、毛沢東時代に蕭乾批判の材料となってしまった。蕭乾にとって夢にも思わなかったことであった。

帰国後の蕭乾は、対外宣伝紙『人民中国』（英文）の副編集長として務めていたが、一九五七年から一九七八年まで、作家としての創作権利が奪われた。その辺の事情については、一九五〇年に書かせられた「自伝」に触れる筈がないが、彼自身の生い立ち及び文学思想上に影響を与えてくれた人物についての言及は、蕭乾文学を考える上で重要である。「自伝」に於ける最後の項目には、

「組織参加要望」があるが、つまり革命組織に参加しようと希望する。それは自発的な要望ではなく、組織に忠誠を示す一種のポーズであり、または一種の思想降参でもあると見ていいと思う。そのような意思表示は、当時に於いて何よりも重要なことである。ただし「自伝」の中で行われた自己批判は、どこまでが本音であるか疑問が残るが、蕭乾は彼なりの知恵でどうにか切り抜けるかと頭を絞って考えたようにも見受けられる。この自伝風の文章は、所々に巧みな言葉を使って当局の目を盗もうとする。そのあたりの事情は行間から読み取れる。

ここで、思想改造運動について触れてみたい。毛沢東時代に行われた知識人に対する思想改造は、前代未聞のことであった。特に知識人に対する政策は、厳しいものがあつた。思想改造運動は、かいつまんで言うと、三つの大きな目標が掲げられていた。〈一〉ブルジョワジーの思想を一掃すること。〈二〉階級異分子（異己分子）を一掃し、知識人の「利用、抑制、改造」といった手段を以て、知識人を従順させること。〈三〉全人民の思想をコントロールし、思想領域の根本的な改造を目指すこと。

思想改造運動及び中国知識人に対する影響に関して、「思想改造運動の起源及対中国知識人的影響」（謝泳著、中文独立筆会<http://chinesepen.org/Index.shtml>）という一文があるが、それによれば、思想改造としての「自己批判文」を書く場合、七歳以前なら出生年月日など、七歳以降から反省文を書く時点に至るまで、学歴、職歴、その他に家庭構成員の状況、財産、職業、社会活動、及び参加したすべての団体、仕事で知り合った友人関係などについて詳細に記す必要がある。事実上、本人との交友関係にあった者は、すべて調べられることになっている。そして、思ったこと、または考えていることをすべて表面に出さなければならない。それは、ある意味で巧みな手段による告発でもある。ここに他人を守る個人の自由は存在しない。自分との対峙に堪えられなかった場合、自殺、または発狂が多発した。思想改造のもう一つの狙いは、すなわち知識人の独立した人格を崩壊させ、個人の思想を撲滅することが目的であった。要するに、革命組織に対する忠誠心を誓

い、新たな自分を発見することによって再出発する。しかし、そこには「信頼」というような自然な心の温かさが無い。

新中国成立の前夜、華北、華東、西南、中南、華南、東北の地区に於いて、それぞれ「人民革命大学」が設立された。革命大学で勉強する生徒は、各地の学校から集められた学生も居れば、「問題視」とされた知識人が収容されたものも居た。「特別視」とされた者は指定された革命大学に収容される。「革命大学」に於ける勉強期間は一年間、六か月に亘る政治学習（大衆哲学を講ずる講義を含む）のあと、思想総括として自己反省文が書かせられる。ここで、一九五〇年華北人民革命大学に収容されたある作家の書いた短い文を見てみよう。

「私は今、古い西苑兵營の灰色建物の塙の隅に坐っているが、六、七メートルぐらい離れた目の前には球場があるが、あそこで三十人ほど集まって、バスケット・チームを組んで遊んでいる。プレー、プレーと大きな声で叫んだ。ちょうど暮れにかかって、燃えるような夕焼けが非常に綺麗である。私はその笑い声と叫び声の中に自分自身を浮かべているが、すべては三十年前の兵營と全く同じ光景であった。生命の活動は精神なき肉体の中に閉じ込められ、すべて外界と隔離されている。今、生命の種子がただ沈黙の中に燃え、そして消えていく。絶筆以来もうすぐ二年経つが、生命の意義が自分の中では完全に見失われた。新生国家の誕生と、こんなに元気が出ない個人とは、誠に奇妙である。」⁽³⁾

先行きの見通しが全く立たない中で綴られたこの文は、作家沈從文の手によるものである。一九四九年二月、北京大学教授だった沈從文は、大学構内に貼られた横断幕で批判され、ショックで自殺を図ったが未遂に終る。その後、病院で治療を受ける。北京大学辞職後、一九五〇年二月に思想改造のため華北人民革命大学に収容された。上記の文は、友人宛の書簡一部内容である。これらの文字は、一見淡々として語られているのだが、生と死の狭間に生きる人間存在の根底から滲み出る寂寥感が漂っている。その苦しい心境は、誠に想像を絶するものである。作家の存在は、現在のみならず、未来への提言があってこそ生の意義が

ある。沈從文にとって個人とは、ほかならぬ創造的な行為を為す生命体なのである。それが生命の意義を意味するものである。しかし、文学創作の環境を失われた作家にとっては、正に精神なき肉体だけが残されたのである。沈從文の言葉の裏には、「国家」と「個人」との間に埋められない深い溝が横たわっていた。

沈從文は、民国時代に育まれた文学界の巨匠である。人口に膾炙する彼の作品は、無数の読者に愛されている。ところが、建国前夜に起った文藝論争⁽⁴⁾によって批判され、自殺未遂を経て創作活動から完全に離れてしまった。一九五〇年、彼は華北人民革命大学に収容され、そこで一年間学習した。ここに彼の書き記した思想改造の反省文を挙げよう。

「解放一年——学習一年（建国一年——学習一年）」（1950）、「自伝」（1950）、「時事總結（時事総括）」（1950）、「我的分析兼檢討（自己分析及反省）」（1950）、「總結・傳記部分（総括・伝記部分）」（1950）、「總結・思想部分（総括・思想部分）」（1950）（『沈從文全集・集外文存』、北岳文藝出版社、2009）。

これらの文章は、自然言語が一つも見られることなく、殆ど脅迫観念で書き記されている。「世界は変わってしまい、すべてが無意味になった。」（『沈從文家事』より）⁽⁵⁾と、かつて沈從文が語ったその言葉の意味合いは、彼自身の辛い体験を踏まえ、個人の自由を抹殺する政治を痛烈に批判していると見ていい。たしかに革命によって中国は、すべて変わってしまった。疾風怒濤の毛沢東時代を考えると、沈從文の絶筆は、ある意味では賢明な選択でもあった。

毛沢東は、かつて「文芸講話」（1942）に於いて文芸形式を強調した。つまり、古い時代の文芸形式（思想も）を改造しなければならない。毛沢東の考える古い形式の文学とは、民衆の生活を離れたブルジョアジーの観念的なものであり、それを変えなければならないのである。一方、革命時代における文芸は、政治と芸術との統一、内容と形式の統一を要求するものであり、すなわち革命の内容と芸術形式との統一を目指すものである。「文芸は革命に奉仕しなければならない」というスローガンの下で、革命時代における文芸家の役

割は、反動勢力を暴露し、人民の革命闘争を讃えなければならないという風に規制された訳である。当時の用語で言えば、「革命」とは蒸気機関車であり、革命時代の文芸は人民の生活を反映するものでなければならないのであった。このように言葉というものは、大衆文化の宣伝道具に過ぎなかった。その結果、毛沢東時代に於ける芸術文学、思想領域は前進するどころか、民国時代に築き上げられた国民文化さえも超えていない。事実、世界に対して影響ある文学作品は一つも生まれなかった。大衆路線を好む毛沢東時代に於いては、大衆文化や大衆思想といった言葉がよく使われていたが、それはあくまでも政府主導権を握った思想文化のイデオログの宣伝に過ぎなかった。国民文化の舵取り（主に出版メディア関係）は、すべて役人の帳簿管理下に置かれてしまった。その結果、自由な考え方を持つ思想の芽生えは、殆ど絶望的であった。事実上、自由な発想に基づく思想、文学、芸術が委縮し、廃れてしまった。

一九四九年以降行われた思想改造は、毛沢東に於ける知識人政策の重要な一貫であり、しかも一時的な措置ではなく、知識人に対する基本政策として文化大革命終息まで続いていた。建国初期に知識人に対する思想調査の制度があったが、それらの調査は、「檔案」（文書）として保管され、それを管理する各組織部門が「思想運動」の際の批判材料に用いる。本人には開示しない。この悪名高い制度があらゆる部門に浸透している。

中国は古から制度としての「史官文化」の伝統があったが、「知」の所有者は、古代では士大夫特権階級であった。庶民とは無縁であるとも言える。「知」を認識できたのは、皇帝と王朝権力のみであった。その封建性が打破されるようになったのは、民国時代になってからのことであった。民国時代には中国知識人が求める「知」と「学問」の自由があったので、多数の著名な文化人が輩出された。その代表的な知識人は、胡適（北京大学文科大学学長、駐米大使など歴任）を中心とした自由知識人であった。しかし、民国時代に生まれた自由知識人は、毛沢東にとって眼の仇となった。建国直後、自由知識人に対する批判の矛先が真っ先に胡適に向けられたのであった。例えば、

五十年代に展開された「紅学批判」（紅樓夢研究批判）は、即ち胡適思想批判そのものであった。前代未聞の紅樓夢研究批判は、紛れもなく現代中国學術思想の挫折であったとも言える。思想家ベンヤミンは、かつてソビエト時代に於ける「芸術の政治主義」について批判したことがあるが⁽⁶⁾、毛沢東時代に於ける紅樓夢研究批判は、すなわち学問や芸術を政治的権威に降服させるという目的であった。先入観を入れず虚心に言えば、未だに中国における学問思想の自由度は民国時代にも及んでいない。

今、自由や思想云々について触れているが、その多くは個人の信条または知性を指すものが多いと思われる。政治的イデオロギーや民族意識はともかくとして、個人の場合、寛容、善意、同情などといった精神は、遥かに柔軟性を持っている。本当はこういうものこそ大事なのである。それらを思う存分に吸収すると、自由な精神を備える教養人というスタイルが形成されていくに違いない。かくして事物に関する様々な価値観は、次代に伝えられ、伝統や文化の発展につながっている。ただし知識人だけが教養人であるとは限らず、E.M.フォースターの言葉を借りれば、「教養人などは大海のなかの一滴のインクにすぎない」のである。だが、毛沢東時代に於いては、それらは硬化してしまい、すべて「階級性」という烙印が刻まれた。個人の信条は絶対的信条になり替わり、あらゆる面で革命組織に対する忠誠心や服従心が強制的に植えつけられ、自由な精神が奪われてしまったのである。

思うに、蕭乾とE.M.フォースターとの交友関係に終止符が打たれたのは、個人の悲劇でもあり、文学上の悲劇でもあった⁽⁷⁾。E.M.フォースターが最も大事にしているのは、友人との関係である。「私の信条」の中でこう語っている。「政治的な嵐が激化しつつある時代には、（中略）AがAでなくなり、BがBでなくなる可能性があっても、二人の人間のあいだには依然として愛と誠実がありうるのだ。生きていくためには、「人格」が確実なものであり実在するのだということにして、それにたいする反証はいっさい無視しなければならないのである。そして証拠を無視することこそ、信仰の特徴である以上、私も個人的な人間関係の価

値を信仰しているのだとは確かに言える。」^⑧、更に、「個人的な人間関係は、今日では軽蔑されている。ブルジョワ的な贅沢であり、すでに過去になった幸福な時代の遺物だと見られて、そんなものは捨ててしまえ、それよりも何か政治的な運動とか主義に身を捧げろとせつつかれる。私は、この主義というのが嫌いで、国家を裏切るか友を裏切るかと迫られたときには、国家を裏切る勇氣を持ちたいと思う。」(「私の信条」、と。

作家にとって個人の尊厳は、命を守るのと同然である。なぜなら、文学と世界とのつながりは、作家個人の創造性によるものであり、決して国家権力に頼るものではないから。寧ろ作家がしばしば国家権力によって脅かされているのは歴史の現状ではなかろうか。

E.M.フォースターは、蕭乾との間に築いた個人的関係を維持できなくなったことについてどう思ったのかを知る由はないが、彼の語った言葉には知見が溢れている。「あらゆる信条の背後には、苛酷で容赦しない、それを奉じるものがいつかは苦しむ羽目に陥りかねないものが潜んでいて、個人的人間関係という信条も、その優雅でやさしい響きにもかわからず、苛酷な恐ろしいものを秘めているのである。一人の人間にたいする愛と誠実が、国家の要求と相いれない場合があるのだ。」(「私の信条」、と。毛沢東時代に度重なった政治的嵐に巻き込まれて、無数の中国知識人は受難に見舞われ、彼らの精神にはいくつか風穴をあけたかも知れないが、彼らが最も欲しかったものは愛と自由であったに違いない。人間が生きる上でただ単にパンだけ与えられて満足するわけではない。なぜなら、芸術の創造的行為は、愛と自由の精神が欠かせないものだからである。沈從文が言うように、精神なき肉体は、正に生命の意義が欠けている。

現代ないし未来の社会は、個人が尊重されなければならない方向へと発展すべきものであると疑う余地がない。独立した個人が尊重されなければ、学問思想及び芸術文化の繁栄は有り得ない。先人から得られた知見を見ると、彼らが常に個人を尊重すべき普遍的な価値観を強調していることが分かる。E.M.フォースターの個人的信条を突きつめて言うと、すなわち、「人間の美点つまり世

界の美点は、つねに創造活動をやめず、友情と誠実それ自体を信じていることにある」(「私の信条」、と。そこに個人尊重が第一条件となっている。その意味で蕭乾の文学生涯も、独立した個人のために信念を貫いて歩んできたと言えよう。それは一作家として守らなければならない最低限の条件であった。

無残に命を失われた無数の中国知識人に比べて、蕭乾はまだ幸運だったと言える。彼は生涯に於いて一度もE.M.フォースターを忘れ去ることなく、晩年に名誉回復された後、再びケンブリッジ大学を訪れた。半世紀以上経った今、蕭乾の自伝「わたしの生の証言」は、漸く世の目に触れるようになり、すべてを明かしてくれた。その背後に波乱万丈の文学生涯が翻弄されていた。その意味で、この「自伝」は、毛沢東時代に行われた「思想改造」を知る上で重要な意義を持っている。紛れもなく価値ある「生の証言」なのである。

【注】

- 楊剛 (1905-1957)、北京・燕京大学卒。在学中、中国共産党に接近、のち革命に参加する。エドガー・スノー夫妻と交友関係がある。一九四四年、米国へ渡る。翌年、ハーバード大学ケンブリッジ女学院に入学。四八年帰国。周恩来総理弁公室主任秘書を務める。一九五五年、人民日報副総編集長を任命される。一九五七年十月七日、睡眠薬を吞んで自殺。享年五十一歳。『楊剛文集』、訳書『高慢と偏見』などある。
- 蕭乾の「中間路線」(第三路線)に関しては、「丸山昇・蕭乾・文潔若往復書簡」(未刊)に於いてもその考えが窺える。それは自由主義でもなく共産主義でもなく、寧ろ「民主社会主義」という考えである。言うまでもないことであるが、この考えが毛沢東の推進する共産主義路線に抵触している危険性は高いものと思える。ちなみに、「丸山昇・蕭乾・文潔若往復書簡」によると、蕭乾は当時の国共内戦をめぐって、国民党と共産党双方とに人民の苦しみを重ねて考え、国共内戦を中止するよう呼びかけた(「半夜三更國際夢」[真夜中のインターナショナルの夢]、この文は、文集に収録される際に削除された)という。この呼びかけに対し、共産党内部には不満があったようである。蕭乾の「民主社会主義」という考えに関しては、「自伝」に於いてイギリス労働党の「社会主義」政策を讀める文章について触れられているが、蕭乾がケンブリッジ大学在学中に接したハロルド・ラスキの思想にかなり影響を受けていたと見られる。ラスキは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで教鞭を取ったが、ナチスによるロンドン爆撃進行のため、ロンドン・ス

クール・オヴ・エコノミックスがケンブリッジに疎開した後、ケンブリッジとロンドン・スクール・オヴ・エコノミックスの双方の講義が両方の大学の該当学生に公開された。ケンブリッジ・キングス・カレッジに学ぶ蕭乾は、ラスキの公開講義に参加したものと推察できる。ちなみに、邦訳『ハロルド・ラスキ 社会主義者の歩み』(Kingsley Martin, Harold Laski, A Biographical Memoir. 1953. 山田文雄訳、社会思想研究会出版部、昭和三十年)によれば、ラスキは、イギリス労働党の中でも最も左翼的な理論家であり、彼の思想は反資本主義的である。その理論は計画的民主主義の主張に現れている。それにも拘らずイギリスに特有な自由主義、理想主義がラスキの思想の底流をなしている。自由闊達なラスキは学生にも人気者であった。ラスキは富裕なユダヤ人の家庭に生まれるが、幼時から天才的なひらめきを見せ、また伝統に対する反逆性的性格は、若い時分から鋭く現れていた。

- 3 「致程応鏐」(一九五〇年秋)、『沈從文全集・第十九卷』、北岳文藝出版社、二〇〇九
- 4 文藝論争の発端は、郭沫若の論説「斥反動文藝」(『大衆文藝叢刊・第一輯』(香港生活文化書店、一九四八)に初出)によるものだった。その中に名指しで沈從文、蕭乾などに批判の矛先が向けられた。

- 5 『沈從文家事』(劉紅慶著、新星出版社、二〇一二)を参照。
- 6 「ロシアにおける新しい文学」、「生産者としての作者」(『ベンヤミン・コレクション5』、浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、二〇一〇)を参照。
- 7 蕭乾とE.M.フォースターとの交友関係については、「中国人民の友、蕭乾の知己、謹んで丸山昇先生を偲ぶ」(『中国文芸研究会会報第341号』、文潔若著／顧偉良訳、中国文芸研究会編、2010年3月)に詳しい。
- 8 『フォースター評論集』、小野寺健編訳、岩波文庫

【参考文献】

- 『顧準文集』(増訂本)、福建教育出版社、2010年
『蕭乾文集』(全十卷)、浙江文芸出版社、1998年
『マーティン・ハロルド・ラスキ —社会主義者の歩み—』
(Kingsley Martin, Harold Laski, A Biographical Memoir. 1953) 山田文雄訳、社会思想研究会出版部、昭和三十年
『沈從文年譜(1902—1988)』呉世勇編、天津人民出版社、2006年

わたしの生の証言

蕭乾

一、家庭出身

私は、一九一一年、父の死後、北京で生まれた。兄妹はいない。

父（蕭秀林）は、モンゴル人、清軍と共に関内に入った手先である。親戚によれば、父は清政府の下級官吏として、モンゴル人に関する冠婚葬祭の登録係を務めていたという。

母（苗字は呉）は、漢族出身で私を九歳まで育てた後、亡くなった。

父は長男で兄弟三人いた。私たちはずっと三番目の叔父と一緒に住んでいた。二番目と三番目の叔父は、共に妻を亡くした。二番目の叔父は三男二女、三番目の叔父は二男二女いる。私は家を離れる（十四歳）まで、学校での寄宿の他に、ずっと二人の叔父の家に代わる代わる住んでいた。

給料や食糧配給に頼った清国の上流階級と同じく、辛亥革命の後、私のような下級官僚の家庭も瞬間に都市貧民のレベルに下がった。私の物事がついた頃から、わが家はとことん貧民になった。三番目の叔父は警察になり、私の母は日雇いとして働き、米屋の被服縫いをしたことがある。冬になると、いつも汚いお皿や缶を手を持って、救済として配給されるお粥をもらいに行く。家は時々食糧が途絶えることもあり、食うか食わずの生活が連続であった。殆ど毎日家中のものを安値で売ったりする。その売った金で「窩窩頭」（大豆や粉でつくった粗末なもの）や豆乳を買うことができる。

私は母の安月給で、何とか小学校（崇実小学校）に通うことができ、卒業できた。そこは教会学校だったが、おかげで私は最も野蛮な宗教教育を受けた。——聖書も暗記させられたし、祈祷の際、いつも目が閉じているかと調べられた。何事にも地獄の話を持ち出して驚かせられた。

私は中学校に入ってからアルバイトを始めた。毎朝五時に起きて絨毯織りを見習う。午後は授業に出る。一九二一年から一九二六年にかけて、ずっと働いていて、見習い（糸巻き）からトルコ

絨毯を織るようになった。その間、半年ぐらい羊の乳を配達もした。学校の主な科目（国語、算数、物理など）を勉強する暇はなく、毎月、一元五十銭のバイト代はもらえるが、時々殴られる（最初の二年間、殆ど毎日怪我をさせられて家に帰る）。毎週土曜日の午後、西洋人の校長は必ず「衛生」検査に来て、きれいに片づけなければ、または遅刻したならば、罰金すると宣告する。そうなった場合、全額はもらえない。しかし、毎月、師匠たちが見守る中で私たちの織った絨毯は箱詰めにしてアメリカへ運送されるが、一平方メートルごとにドルで計算された。

燕京大学卒業（一九三五年）まで、私はさまざまなアルバイトをしていた。一九二六年、夏休みを利用して北新書局で見習工として働いた。高校の頃、教務課で謄写版の講義印刷を手伝った。燕京大学では西洋人の子供の世話をしたこともあるし、『燕京新聞』の発送も手伝った（時給二十五銭）。汕頭、福州での講師も務め、その後原稿料で自給生活をするようになった。

このような自給生活は、私にとって学ぶことが多かった。つまり、何が辛いのか、何が搾取であるかといったことが分かった。しかし、それは早い段階で登り詰めようという考えにつながった。すなわち、再び食うか食わずの状況に陥らないために、または「人非人」の地位から解放されるために、私は登り詰めようとした訳である。

私の過ちは、このように自分の成長に於いて登り詰めようという個人的な欲求とプロレタリアートの解放との結びつきをしなかった。言い換えれば、プロレタリア政党の下で歩もうとしなかった。そのため、十九歳以降の私は、ずっと暗い個人主義の道を歩んでいた。

二、少年先鋒隊（一九二五～一九二六）

私は中学一年生の頃、ある組織作りに手がけた。名称は「少年扶助団」だ。主な動機は、学内の学生を連合して、貧しい学生を抑圧し、金持ちにへつらう教務長の馬氏と対抗するためであった。それは、安全門（旧北京の城跡——訳注）大三條の崇実中学校での出来事である。その後、この組織は学校の圏外へと拡大し、「十人通信団」

を発足させた。当時我々と連絡したのは、于道泉（現在、北京大学でチベット語を教えている。北京市北専街83号在住）、及び海甸に住む李安宅（人民解放軍と共に西康へ進軍、チベット専門家、西南軍区政治委員、少数民族管轄責任者）の二人であった。彼らは皆正式の黨員（その頃は知らなかった）である。于氏は、いつも『共産党宣言』、『帝国主義と税関』、『共産主義のABC』を私たちに見せてくれた。しかもよく海甸老虎洞李氏の家でグループ会議を開く（于と李は齊魯大学に学ぶ私の従兄〔二番目叔父の息子〕と同級生）。私はいつも彼らと相談し、少なからぬ革命理論を知るようになり、仕事上も単なる鬱憤払いでなくなった。「五・三〇事件」（1925年5月30日に中国上海で一般市民のデモに対して租界警察が発砲し、多数の死傷者（死者13人、負傷者40人余り）が出た事件。デモ発生の発端は、5月15日、上海日系紡績工場の女性労働者、顧正紅が工場側の発砲で死亡したのがきっかけとなった。横光利一の小説『上海』にもこの事件について取り上げられている——訳注）の際、私も積極的な組織者の一人であった。

ところで、「少年扶助団」は、早い段階で学校当局にとって眼の仇になった。校長羅遇唐（現在、北京在住）と馬氏は、当時北方軍閥の偵察隊とのつながりがあった。一九二六年秋、私は彼らの考えた策略で捕まえられ、報房胡同に監禁された。移送の途中、たまたま電車に乗っていた同級生によって目撃され、その後彼らが私を助けてくれた。

私は拘留所で四、五日監禁され、顔を殴られたが、狭いオンドルに監禁された十八人も、みな「赤化分子」と看做されていた。その中の一人は私よりも若く、年齢は九歳に過ぎなかった！三回目の尋問の際（自分はキリスト教信仰を持っていると主張した。私たち十人が連絡する時、すべて暗号で宗教用語を使った。「上帝」は、即ちマルクスであり、「永生の真理」は、即ち共産主義である）、彼らは謄写版で印刷された一枚のリストを私に見せた。リストには北京各学校の隊員（当時、CYと呼ぶ）が書かれ、一人一人の名前の下に年齢、住所及び組織の評定が記されている。私の名前もそこに載った。

これでは私から出る言葉も無くなった。当時、組織に対して理解が足りなかったのも、油断した。それは、その後私の「無党派」思想の一部の原因にもつながった。

拘留所で五日間拘留されたあと、突然釈放され、学校に戻ってからもまた監禁された。どのように釈放されたかについては、その理由を全然知らなかった。釈放はきっと誰か助けてくれた人がいただろう。羅遇唐も自分で助けてあげたので、今後彼の言うことを聞いてくれと言っている。二番目叔父の次男（保安隊員）も、彼が人に頼んで助けてもらったと言っている。獄中の警官は私に向って供述しろと迫った時、彼にも過激な息子がいたが、どうしてもここから出てもらいたいと言った。だが、私が得た確実な情報は、団員たちの努力によるものだったのである。

学校に戻された後、校長から、外出してはいけないと警告された。文章を書くのは許可されたが、客との面会は校長の同意が必要となり、ただし手紙の場合、彼の審査が必要である。それでも「少年扶助団」の活動は、秘密裏に行われていた。私はペンネームで文章を謄写版の刊行物に発表した。ある日、それがばれてしまった。

獄中から出た後、私はすぐ他人に頼んで、于（道泉）、及び李（安宅）氏の情報を探してもらったが、彼らは既に身を隠した。于氏は、その後すぐラマ教の雍和宮に入り、チベット語を学び、十年間も続けていた。私と革命組織との関係は、これで切れてしまった。

三、北新書局——北伐（一九二六～一九二八）

半年あまり監禁された後、夏休みになって私は自由の身になった。従兄からは、私に向かって、学校を止めて郵便業務（手紙配達）の試験に参加するよう、彼と一緒に家計を助けてもらおうと勧められた。しかし、自分としては勉強だけは続けたいと考え、あちこちへ職を探し求めていた。京城印書局の試験にも挑戦し、景山印刷所などの見習工もやったことがある。最後に翠花胡同の北新書局の見習工として採用された。ここでの経験は、私の成長に大いに役立った。

その話は、「五四」運動以後、まだ新文学の勢

いが衰えていない頃だった。北新書局では魯迅先生の編集した雑誌『語絲』、及び魯迅先生の『呐喊』、『墳』などの作品が刊行された。徐祖正の『蘭生弟の日記』、章衣萍の『情書一束』など極端な個人主義のエロ作品も刊行され、また張競生の『性史』といった誨淫作品も印刷された。

私の仕事は校正と発行に携わった。当時多くの「名作」を、すべて私が丁寧に校正した。そして、本を借りて毎晩アパートに持ち帰って読んだ。

こうして、革命に対する幻滅に次いで、ロマンティズムの作品を読むようになり、十五、六歳の私には、既に不良の種子が埋めこまれた。そのため、私の生涯の半分は恋愛問題で悩まされ、文学の上では頹廢的唯美主義の道を歩んでいた。現実甘んじて分析を怠り、人生に対しても戯れの態度を取った。

北伐戦争が成功した後、私は学生会会長、学内雑誌編集長に選ばれた。その時私は、既に一九二五年の自分とは違っていただけ感じた。北伐戦争の成功を祝うその夜、私は水道管で作った旗を掲げ、北海より出て中南海に入り、「労働者の地位」を高めよう、と声がかすれるまで叫んだ。私はみんなの力で、学内に於ける青年会（キリスト教団体）の優位を覆し、彼らの執務室まで奪った。しかし、革命に対する十分な認識は持っていなかった。その頃は、組織との関係も切れたので、共産党と国民党との関係についてよく分からなかった。一方、北京市「党部」の権力の座は、羅遇唐のような卑劣な者にまで握られているので、革命は偽物だったと思った（当時、ある人から北京市「党部」まで登録に行くよう勧められたが、これで組織の関係が回復されるかと思った。ところが、行ってみたら、そこに坐っていたのは羅遇唐であった。彼は私を「赤化分子」だと名指し、登録を許可してくれなかった）。他の方面においても、私はロマンティックな考えで影響され、革命組織との関係を積極的に求めようとしなかった。于氏の雍和宮入り及び北伐戦争後の国民党の有様を見て、すべて革命のせいだったと思った。

一九二八年、羅遇唐は私を買収しようとして、卒業後、私に学校に残って教員になってもらおうと表明してくれたが、私は乗る気がなかった。そこで、彼は「赤化分子」と看做された私を近づける

必要性がなくなり、私を追い出そうとした。しかも彼は、軍閥時代の偵察隊長から三民主義の信徒に変身した。ある日、羅遇唐は、私が彼を侮辱していると誤認して私の私信を開封した上、私を呼び出してまで叱った。こうして、私は卒業まであと一学期が残っているにも拘らず、学校から追放された。

当時は確かに景気低迷だった。北新書局を追われた後、私は従兄との関係をも断絶した。その日の夜、同級生の家を駆け回ったが、漸くある所に寝場所を確保した。羅遇唐を訴えようとも考えたが、「市党部」の実権が彼の手握られているので、上訴を諦めるしかなかった。

その頃、ちょうどベトナムから来た華僑の同級生趙澄（当時、既に燕京大学国文専修科に転学）は、古里潮州へ帰省するので、私は彼と同行した。私が高校から追放された三日後のことであった。私は生まれて初めて北京から離れ、全く知らない土地、言葉も通じない汕頭へやって来た。

四、汕頭——輔仁大学（一九二九～一九三二）

汕頭では角光中学で国語を教えていた。その職業は、北京燕京大学国文専修科卒業生と偽って手に入れたのであった。そこで過ごした半年については、既に小説『夢之谷』の中に書かれている。それは恋愛物語だが、北新書局で読んだロマンティックな物語を実践として書いたつもりである。汕頭で経験したのは正真正銘の恋愛であった。だが、汕頭で封建社会とは何かを思い知らされた。私が好きだったその女の子は、地元ヤクザの欲しがる女でもあった。一九三一年、私は彼女を助けに行った時、既に遅すぎた。小説の中で書かれた人物は、ヤクザと決闘するつもりであった。後で分かったことだが、私が内地で彼女を探した際に乗っていた船やバスは、すべてあのヤクザが経営したものであった。しかもそのヤクザは、汕頭「市党部」の委員にもなっていた。

私は自ら言った嘘を実現させるために、燕京国文専修科に入った（もう一つの原因は、私には高校卒の卒業証書がなかったため、正規の大学受験はできないのだ）。ところが、学校が始まって間もなく、私には古典とは無縁で、勉強は続けられ

ないものと思った。楊振声先生が教えてくれた現代文学は、とても興味津々であった。特にハーディ（イギリス小説家）の作品が好きであった。その他に、日本の作家賀川豊彦にも魅了された。彼はキリスト教社会主義者であった。それまでの私は、反宗教の急先鋒だったが、彼の小説『死線を越えて』（1920）を読んでから、キリスト教も共産主義と同じように、人間社会の不平等を訴えることができると思った。賀川自身は、東京で住んでいるアパートに一人の乞食と売春婦とを収容して暮らしているが、その二人の精神改造をするために物語を書いたのであった。このようなロマンティックな人道主義の考えに大いに関心を持った。（最初に賀川を紹介してくれたのは、張光新であり、既に亡くなった。彼は全国婦人連合会福祉部張淑美同志の父親である。張淑美もこのことを知っている。）

賀川豊彦は、私にとって「中間路線」及び「改良主義」を求めるために最初の論拠を与えてくれた人だったと言ってもいいと思う。なぜなら、これまでに私は、十数年に亘って強制された宗教教育を受けたのである。

このような経験があったので、一九二九年、楊績から私に対して革命の参加を勧められた時、私の反応は積極的にならなかった。彼女は沢山の理論書を紹介してくれたが、私は読む気がなかった。文学芸術の作品は少し読んだが、基本的に私は、ロマン主義及び人道主義の作品を読むのに夢中になった。

一九二九年の秋、私は高校卒業証書を偽造して輔仁大学正科一年生に入学した（当時、楊績の兄は輔仁大学学生課主任を務める。彼に色々世話をしてもらった）。

輔仁大学で二年間勉強したが、カトリックはプロテスタントよりもっとひどいと思った。図書館にはローマ法王によって認められた本しか置いていない。授業に使われた教科書は、特別編集されたものであった。そして、何事にも聖母マリアと神が讃えられている。行政による学生管理は厳しく、男女別々で、ある同級生の三歳の妹も宿舎に入ることができなかった。ところが、夜になると、輔仁大学の紳士たちは、八大胡同（当時、北京前門外にあった有名な花柳街——訳注）へ遊び

に行く。

輔仁大学で文学上のロマンティックな傾向は、益々強くなった。ある失恋した神父は、私にアイルランド作家の作品を沢山紹介し、また彼自身の恋愛物語についても語ってくれた。時々神父の部屋で深夜まで彼の作品朗読を拝聴するが、彼は朗読しながら泣いたりもした。

その後、修辞学を教えている西洋人教員（彼は恐らく中学程度のレベルにも達せず、中国人に対する侮辱はひどかった）の授業をボイゴットしたため、私は処分された。また学部主任とも喧嘩した。大学に入って二年後、私は燕京大学の同級生の要請により、福州栄華中学教員になるため赴いた。その同級生は、福州で教務長を務めている。

五、福州——燕京大学卒業（一九三二～一九三五）

福州栄華中学校で一年間、国語を教えたが、ある組織をつくった。名称は「天籟団」という。それは濃厚な改良主義の組織だが、目的は国語普及のためである。

その頃から小説を書き始めたが、投稿はしなかった。

一年間、教えたあと、少しお金をためたが、一九三三年、再び北京に戻り、燕京大学に転学した。職業を探すために、私が選んだのは新聞専攻であった。

汕頭及び福州に居た時、私は好んで「ペンネーム」を用い、「若萍」（最初は「一燕」）と名づけた。当時は、さまよいの生活を一種の誇りだと思った。私は沢山の流離の詩、例えば「十年生死兩茫茫」（蘇軾「江城子」——訳注）などを暗誦できた。さすらいは、私のロマンティシズム及び恋愛至上（その頃は「至上」のレベルに達したと言える）の傾向に相応しいものだったかも知れない。私の最初の小説集『籬下』及び散文集『小樹葉』は、殆どそういった内容であった。そして、人生に対しても流離の角度から考えていた。私は、人の前で自分はなぜ理論書を読まないかについて話すのが好きであった。つまり、こういうことである。理論家は地図を作るが、私は旅人として、リュックを背負って、理論家たちよりも山や川を詳しく知っていると思う。こうして流離の生

活に憧れた私は、すっかり愚かな無思想者になった。

一九三三年、『大公報』（天津）は、二つの副刊があった。一つは保守的な「文学副刊」、編集者は呉宓で、殆ど文語詩が掲載される。もう一つは「文藝」で、編集者は楊振声、沈從文であった。掲載された文章は、すべて白話作品である。私は「文藝」欄に多くの小説を発表した。燕京大学で二年間かかった勉強の費用は、殆ど原稿料で賄った。卒業までの半年間、小説は殆ど書けなかったもので、論文を連載した。のち商務印書館から刊行された『書評研究』は、当時発表された文章である。殆ど当時流行っていた直覚派の文芸理論を寄せ集めたものである。すなわち、アナトール・フランス、ベネデット・クロウチェ、及び当時有名な直覚派たちであった。それらは文学に対する私の誤った認識の根源であった。

一九二九年、一年間に亘って燕京大学国文専修科で楊振声先生の講義を聞き、そして一九三三年より、楊振声先生の編集した大公報の「文藝」欄に投稿し、先生と親しくなった。卒業間近に、私は先生により天津『大公報』に紹介された。学校の門を出て十五日経って、荷物をまとめてその新聞社に入社した。

六、大公報入社（一九三五～一九三九）

『大公報』に勤務する数年間、私の一生の中で重要な社会経験となった。一九三五年の時点では全然思いも寄らなかった。思い出になったのは、やはりさすらいの生活であった。それから定職があれば、生活が保障できるという実感。すなわち多くの作家の生活を見れば、新聞記者という職業は、将来の創作にとって最も有利になると感じることができた。なぜなら、外界と接する機会は最も多く、流動的で、しかも最も文藝的（一九三四年、鄭振鐸の編集した『私と文学』〔商務印書館〕の中で、自分はこの願望について触れている）だからである。

最初は来今雨軒（北京中山公園にある有名なレストラン）。1915年開業。以前は北京大学教授による、土曜日午後国学講座（無料）が好評——訳注）で『大公報』社長、胡政之と面会した時、私はこ

う説明した。自分が新聞界に身を投じたいと思ったのは苦しい民衆を取材するためであり、できれば毎年なるべく旅行の機会を与えてくれるよう希望した。胡政之は、大公報は最も民衆の苦しみに関心を持っているので、誰か取材に行ってくれる者が現れるよう希望しているとも言った。

一九三五年から一九三九年にかけて、私が『大公報』に携わった仕事は、主に「文藝」欄を編集し、また編集長の管轄下の副刊を管理する。一九三九年、香港で一か月の国際面を編集したことがある。

一九三五年から一九三六年まで、私は天津で「文藝」欄、及び娯楽中心だった副刊「小公園」を編集した。一九三五年の秋、画家趙望雲（現在、西北文聯）と一緒に魯西洪水災害を取材に行き、その後蘇北へも足を運んだ。この年、河北女子師範学校で一年間の授業を担当した。

一九三六年春、華北情勢が緊迫する中で、『大公報』は上海に移転すると決まり、印刷機器の半分が上海に運送された。そして、若手も南下するが、私もその一人であった。

上海に移った後、私は津滬（天津と上海）二か所の「文藝」欄を編集し、同時に両方の副刊をも管理した。上海で左翼文学に接近し、再び魯迅先生と会った。当時、『大公報・文藝』欄の方向は進歩的だったので、国民党中宣部（宣伝部）から何度も警告を受けたことがあった。私は情熱に溢れた多くの友人から励まされ、北京で「新月派」から受けた少なからぬ影響を何とか払拭した。そのため、小説『栗子』、『落日』、『夢之谷』は、以前の作品とは異なる内容であった。つまり、私は反帝国主義、反封建の重要性が分かったのである。当時、左翼系の雑誌『譯文』、『作家』、『中流』にも、私はよく文章を発表した。

ところが、「八・一三」事変（第二次上海事変。1937年（昭和12年）8月13日から始まる民国政府軍の上海への進駐とそれに続く日本軍との交戦である——訳注）で、『大公報』は、八面記事を四面記事に縮小し、その後、更に二面記事に縮小した。胡政之は忙殺して、抗戦に対する信念が薄らいでいるように見えた（上海から撤退する前に、彼は講和に関する社説も発表したという）。多くの「暇人」はリストラされ、私もこれで失業した。

一九三七年から三八年まで、私は内地を転々とし、楊振声、沈從文及び朱自清先生には世話をしてもらった（彼等と一緒に教科書編集に携わった）。そして、漢口から長沙を経て昆明に到着した。その間、漢口の大公報「文藝」編集に携わり、紙幅が縮小され、一か月に一回の刊行ができない時もあった。

ここに補足説明の必要があるが、一九三六年、私は王樹蔵と結婚した。我々は一緒に避難したが、彼女は避難中に西南聯合大学に入学（現在、王は全国婦人連合会で仕事をしている）。

一九三八年秋、香港『大公報』は、発行準備作業に入った。胡政之は私に参加するよう要請した。こうして、私は再び「文藝」欄を編集するようになった。

香港にいた頃、私は二回ゲリラ地区に行ったことがある（一回目は宝安、二回目は黄浩同志と一緒に嶺東に行った）。その時、黄浩同志（汕頭人民市政府）は南僑中学を運営していた。彼らの導きで、私は始めて国民党の悪政実態を認識できるようになった。その頃、私は七、八篇の文章を書いて国民党の暗黒面を批判した（桂林で出版された『見聞』に収録、のち『人生採訪』に収録）。当時、重慶の『大公報』は転載を拒否しただけでなく、香港まで文書を出して私の文章を攻撃した。一九三九年春、もう一度滇緬ルートへ取材に行った。

私は自分なりに左翼化を直覚したが、理論的根拠は何もなかった。当時は恋愛中だったし、喧嘩で離婚騒ぎにもなって、その後離婚した。そのうち、私はレオンチェフ（Wassily Leonitief）の『政治経済学』及び毛澤東の『新階級』（未詳）を読むと、自分は進歩陣営側に立っているのが間違っていないと思った。ただ中国歴史の発展に関しては、依然として曖昧模糊であった。そのうえ、『大公報』の営利至上主義、日和見主義の傾向は、多少なりとも私にも影響したものと思われる。私はただ暗黒面を呪うだけを知っており、光明を求めようとはしなかった。当時、進歩の追求はそれほど難しくなかったが、抗日運動の参加は正に進歩的だったと言ってもいい。だが、自分はこの現実に対してそれ以上の認識を持たなかった。

一九三九年九月、私は三角恋愛に陥り、ちょうどある偶然の機会にイギリスへ渡った。友人の中で九龍の岸部まで見送りに来てくれたのは、楊剛だけであった。

ルームメイトの李純青は、当時の私の心境及びイギリス渡航の経緯を知っている。とにかく、あの日以来、あつと言う間に七年間の歳月が流れていた。私は中国歴史における最も大事な時期とすれ違ってしまった。

七、イギリス七年間（一九三九～一九四六）

私をイギリスへ紹介してくれたのは、CY時代に私の連絡者、のちラマ教寺院（雍和宮）に入った于道泉同志であった。彼は一九三五年に海外へ出かけ、フランスを経てロンドン大学東方学院でチベット語、及び中国古典文学を教えた。一九三九年夏、同校の中国語教員が辞職したので、会議で候補者が求められた。彼は恐らく新聞で私の名前を見たのかも知れないが、学校に私を紹介してくれた。学校側からすぐ私宛の手紙が送られてきたが、ちょうどその時、私は滇緬ルートの取材中であった。

私が乗船したその日（九月一日）、ワルシャワはナチスに爆撃された。乗船者の中で多くの人が辞退し、おかげで三等船室のチケットを持った私たちは、二等船室に泊まることとなった。しかし、サイゴン到着後、乗った船（フランス船籍）はフランス海軍に徴用され、乗船した他の人は、ほかの場所に泊まると許されたが、四十七名の中国人は、収容所に監禁された。

私のイギリス滞在期間は、三つの時期に分かれている。一九三九年から四二年までは、ロンドン大学東方学院中国語講師を務めた。この間、同時に『大公報』の通信員を兼ねた（旅費は新聞社から提供されたから）。一九四二年から四四年までは、ケンブリッジ大学キングス・カレッジの大学院時代、イギリス現代小説の研究。一九四四年から四六年までは、『大公報』駐英事務所の責任者であった。

ロンドン大学東方学院（老舎がそこで教えていた）は、イギリス植民地の官僚たちの定年退職後の養老院であると言っている。「有色人種」に対

する蔑視と侮辱（特にインド、フィリピン人の同僚に対して）は、啞然とさせられるものがある。使われた教科書も蔑視用語が多かった。

学校の外では、反ソ連及び反共産主義の雰囲気にも包まれた。私は、イギリス共産黨員、極東専門家Arthur Clegg氏との交流があったので、彼に案内され、一九四一年の「人民議会」（イギリス共産党組織）へ参加したが、そのあと秘密警察から警告された。当時、「外国人」として夜八時以降は外出不可、または場所変更の宿泊も禁止、自転車も禁止といった禁令が出された。「有色人種」向けの商売を行う数軒の宿泊施設を除けば、部屋を借りるのは至難の業であった。

仕事の関係で、私はある夏にバーミングガムへ行った。そこは重工業都市で、悪名高い貧民窟がびっしりと並んでいる。バーミングガムでその光景を見た私は、資本主義国家では繁華な目抜き通りの裏地には、日も当たらない地獄のような現状があるのを知った。

三年間に私の書いた記事を見ると（一部は『人生探訪』に収録）、私は些か「進歩」したかのように見えた。帝国主義を憎み（階級の立場からではなく、民族の立場に基づく）、貧富の差には驚いている。同時に資本主義国イギリスの表面的な現象（例えば、食品配給の公平さ、交通秩序の良さ）に関しては、頗る羨ましくも感じた。当時、私の心の中で行った対比は、あくまでも封建時代に止まった半植民地の中国の現実を比べてみた。以前と同様、世界の歴史の歩みに対してしっかりした認識を持っていなかった。

ケンブリッジでは、ハロルド・ラスキ（Harold Joseph Laski, 1893—1950、イギリス労働党左翼の指導者——訳注）の講義を聞いたことがあった。ラスキ氏は、イギリス労働党の中でソ連に対して比較的友好だが、彼の出発点は貴族派で、「社会主義」の手段を以て資本主義の実現不可能な企画を救おうとしたのであった。その他に、私は「若手政治家」のグループ、そしてマーティン（不詳）、ヴァージニア・ウルフなどとの交流もあった。彼らとの交流は、私の「中間路線」の礎にもなった。

一九四一年の暮、真珠湾事件の発生後、中国は侮辱された半植民地から突然、「四大列強の一国」

として地位が上がった。日頃から中国を蔑視した人は、いきなり打って変わって、「中国は偉大な友」だとまで讃える親中派もいた。イギリスに住んでいる中国人は、「日本人」と誤って看做されていなければ、賓客として扱われる。放送、出版、講演、宴会にも招かれ、または奨学金も送られる。私もイギリス文化委員会から奨学金をもらって、イギリスのある貴族学校での研究に招かれた。

イギリス出版界の要求に応じて、私は五冊の本を書いた。内容は頗る進歩的だったが、今読み返すと、国内の現実状況に比べたらやはり大きな差があったと思う。国民党側の宣伝よりはましだが、基本的に書かれたものは、やはり古い知識人の考えに過ぎず、人民の明るい面を十分に表現できなかった。

キングス・カレッジでの二年間は、私の一生の中で特別な経験であった。二年の間、殆ど外界との隔絶の中で、毎日、黒い外套を覆って殆ど価値の無いいわゆる心理小説の研究に没頭していた。その頃から、イギリス小説家E.M.フォースターと知り合った。彼は、一九四〇年代には進歩的であった。一九三八年、パリで開かれた世界作家会議の際、E.M.フォースターは、「もし私が若者ならば、共産黨員になるに違いない。」と大声で叫んだ。しかし、第二次世界大戦の初め、経験のない「進歩」的作家は、殆ど右翼化した。私がE.M.フォースターと知り合った時から、彼は既に自由主義者、及び人道主義者に戻っていた。それでもE.M.フォースターは、当時イギリス人権連盟主席として、時々抗議活動にも参加した。E.M.フォースター（七〇歳近く）も、キングス・カレッジの出身で、週末、私はよく彼の家で過ごした。私は、四年間に亘ってE.M.フォースターの作品をめぐって彼との書簡を交換し、百通余りの書簡を持っている。多くの問題に関して私の見方は全然違うが、彼の創作における潜在意識の方法を崇拜しているので、大いに影響を受けていた。今から思えば、E.M.フォースターと私とは、異なる世紀の人で、また別世界の人間であった。彼は、十九世紀の自由主義代表者であり、またはイギリスのブルジョア階級では「開けた者」の代表者でもあった。私はE.M.フォースターとは意気投合をしてお

り、ある意味では深く影響を受けた。

一九四三年、重慶から訪英代表団がやって来たが、『大公報』社長胡政之も、代表団の一員であった。ケンブリッジを訪れた胡政之から、『大公報』駐ロンドン事務所の設立を強く頼まれた。私はあと一年で論文も完成し、学位も取れる筈だったが、放棄したくはなかった。二年間の黒い外套生活は、もう飽き飽きしてしまい、最終的には受け入れた。

一九四四年の春、爆撃の中で、私はロンドンの新聞街、フリート街 (Fleet) に事務所を開設した。それは、連合軍がノルマンディーに上陸した六日目のことである。新聞記事の内容は、大陸の戦争に関するものである。間もなく私は、戦地記者の資格を与えられ、パリ解放後、掃海艇に乗って海峡を渡り、パリに到着した。その後、米軍第七軍団と共に、フランスより西ドイツに入り、ライン河をずっと下って、その西岸に到着した。途中、戦場の他に、米軍兵士の乱れた生活——飲酒、色情、特に黒人に対する蔑視行為を目撃した。

一九四五年の春、国連大会の取材のために、ドイツからサンフランシスコまで行った。十日間ほど滞在したが、あまり取材できなかった。そして、胡政之社長の同意を得てアメリカを見て回った。当時、アメリカに対して羨ましい眼差しは、多少持ったが、アメリカは欲張りで、貧富の差が激しいという印象に過ぎなかった。南部に行ってみたら、アメリカの人種差別はイギリスよりも遙かに超えている。サンフランシスコで、私はアメリカの新聞による中傷誹謗がひどく、報道に対する責任感がないのを見た。あそこで、私は更に戦後世界を独占しようとするアメリカの野心を見抜いた。ある日の午後、一部の外国記者がカリフォルニア港を遊覧すると招待されたが、乗っていた船の周りに、突然、空から沢山の飛行機が飛んできて、我々の乗っている船に襲いかかってきた。船の前後とデッキの左右に賈物の爆弾が落ちて、乗っている人は、皆水しぶきで全身濡れてしまった。船上の放送では、武器を一つ一つ紹介されたが、まるで世界制覇の資本を見せかけているようであった。

六月初め、ロンドンへイギリス総選挙を取材に

行った。労働党が空前の勝利を収めたことでイギリスの「民意」に対してある錯覚を生じさせた。それも私の「中間路線」の考えを大いに助長させたのである。

総選挙のあと、私はポツダム会議を取材するため、ベルリンへ行った。しかし、会議の取材は、あまりできなかった。途中、英米空軍による爆撃を目撃したが、IG、Cartelなどといった大企業が爆撃の対象にはならなかった。また、英米占領区におけるドイツの反動勢力の台頭も見かけた。その秋、南ドイツへ出かけ、ナチスの残酷な収容所の遺跡を見学した。そして、アメリカ占領軍とSS (ナチス親衛隊) との結託、及びアメリカ帝国主義がドイツで如何にしてナチス支配を受け継いだのかをつぶさに見た (『南徳の暮秋』に収録)。

二年間の戦地記者を通して、この目で資本主義、帝国主義の醜悪ぶり及び脅威を見たが、真理は把握できなかった。本当の真理は、やはりソ連を始めとする世界人民の真正な利益、及び平和と民主だと思う。これに関して言うと、私は貴重な見聞を台無しにし、国際情勢に対して完全に強権政治の観点から見ているに過ぎなかった。つまり、国家間には利害関係しかなく、友情というのが存在しないと思った。それは、主に私が英米の卑劣な行動を見ていたからである。ソ連に関する知識の多くも、英米によるものであった。従って、一九四五年、結ばれた中ソ条約が公表されてからも、私は当時のイギリス右翼新聞に報道された「ツァーの強権台頭」を知らず、強権政治に関する見方を更に強めた (これについては、一九四八年香港で喬冠華同志に語ったことがある)。一九五〇年中ソ友好条約が締結され、始めて私の疑いを払拭させ、私にインターナショナルの基礎知識を教えてくれたのであった。漸く最近の朝鮮戦争勃発に至って分かったことだが、強権政治とは、略奪性を目的する資本主義国家の政治であり、世界平和を最終目標とした共産主義世界において、強権政治の存在は有りえないと、そのように理解するようになった。

一九四六年初め、祖国に帰る前にスイスへ行った。この旅行で、またも私の「中間路線」を大いに助長させた。議会制度により、三つの言語文化が全く異なる民族が一緒に住んでも問題は起きな

い(スイスを桃源郷の如く描いたあの出鱈目の報道は、『人生探訪』に収録されている)。イギリス労働党の当選で一連の見せかけの「国有化」の方案、例えば、無料による歯の治療、妊婦牛乳代といった人を誤魔化す「仁政」が実施されることによって、私は「社会民主主義」に対していっそう濃厚な幻想を抱いたのであった。と同時に、抗戦期間中、国内における人民と反動派の闘いを殆ど知らず、また「政協」時期の綱領とイギリス労働党の政治大綱とは同工異曲だとも思った。

こうして、私はぼんやりしている最中、「国共合作」の上海に帰ってきた。私と一緒に帰ってきたのは、イギリス人の血統を持つ、しかもイギリス文化に影響を受けた華僑の妻であった。

八、帰国——香港より北京へ (一九四六～一九四九)

上海に着いたあと、住宅問題を解決するために、私は復旦大学の教職を兼ねた。イギリス小説史、英語及び新聞創作を教える。

『大公報』の仕事は、副刊編集以外に、国際面の社説を執筆する。

その頃、学生運動が高まった時期——反米、反飢餓の中で、私は抗議電に署名した(当時、十一、二名の復旦大学教授による署名、私も毎回署名)が、積極的には参加しなかった。客観的には私は、新聞社、復旦に於いて正式の仕事を持っているが、基本的に私は、しっかりした認識と勇気を持っていなかったのものであった。思想上に於いても、「中間路線」の道を歩み、自ずと行動は、本気で人民側と革命側に立っていなかった。

『大公報』新聞社において、私の地位は抗戦前と違った。社長はなるべく私を取り入ろうとして、わざわざ五種類の株から二百株を分けてくれた。私は実際の業務に携わり、大公報の成長を詳しく知っているのだから、表面的には中立の態度を取っているが、実際は利益があるとすぐ手を出す。一例として、一九四六年、ジョン・レイストン・ストアート(1946年より米国駐中国大使、John Leighton Stuart, 1876-1962 —— 訳注)に頼んで、アメリカから資金提供をしてもらったが、失敗に終わった。

『大公報』社説の実権は、社長の手にはしっかりと握られている。国内向けの社説は、よほどの事がない限り、若手には書かせない。ただし国際論説の場合、比較的自由的幅は多い。しかし、書き上げた文章と掲載された文章とは、やはり差があった。時にはその差は大きい。当時私の政治的レベルでは、進歩的な文章は書けなかった。大抵、『大公報』のしきたりに従って書く。だが、私の場合、二百万字近くの評論を書いたので、恐らく「強権政治」や「中間路線」といった荒唐無稽な論語を發揮したのかも知れない。ただ自分の書いた文章の中には、イギリス労働党の「社会主義」政策を讀める文章は数篇あるが、反ソ連の文章はない。親米の文章はなく、寧ろ露骨な反米文章、例えば、「為美國擔憂」、「反美情緒之分析」など数篇がある。当時、『大美晩報』(Shanghai Evening Post and Mercury —— 訳注)は、その紙上に二回にわたって大幅な紙面で反論を展開した。

私は新聞社、学校以外の社会活動が多くなかった。孫文夫人福祉基金会委員を務めているが、『大公報』に幾つかの記事を発表するほかに、あまり力を尽くせなかった。そして、全国文聯候補理事にもなっているが、会議参加の他にあまり活動はしなかった。

祖国に帰ってから、私の家庭はずっと穏やかでなかった。妻の謝格温は、英国では自分は中国人だと自覚しているが、中国では自分は英国人であると自負している(顔立ちもイギリス人の恰好をしている)。同時に、彼女の心の中で思い描いた中国は、林語堂の小説に描かれたような庭園楼閣であった。ところが、復旦に移った翌日の明け方に、国民党警備司令部の武装警察による捜査に遭い、彼女はパニック状態に陥ってしまった。そして、インフレによる生活の質の降下、家の中のゴキブリ、ネズミの出現、更に言葉も通じなかった。こういった事情が重なって、いっそう彼女のイギリスに対する帰属意識を強めた。自分の一方的な思いから怨みへ変わり、そして感情亀裂につながったのであった。

一九四七年八月、私の息子鉄柱が生まれた。十一月、私の家庭が崩壊した。当時、すぐにも上海を離れたかった。北京の数名教授によってある研

究団体が発足したと聞き、すぐ手紙を書いて企画者の一人である銭昌照に送った。翌年一月、彼は私に編集者として来てもらうよう同意した。しかも宿も提供してくれると約束した。こうして雑誌が予定通り刊行された。一九四八年二月、私は北京に十八日間滞在して上海に戻った。当時は、復旦大学の授業を終えた後、『大公報』に半年間の休暇を取るつもりであった（同時に、北京燕京大学新聞学部からの要請で、蔣蔭思の出国期間中（一年間）の主任兼任を同意した）。

ところで、その研究団体及び刊行物の背景は複雑で、しかも彼らの主張は当時の革命情勢に不利だったことが後で分かった。当初の計画では、その団体責任者の誰かに香港まで派遣して説明してもらおうとも促し、もし実現しなければ、私は約束を破棄して北京へ行かないと考えた。その間の手続きは複雑で、彼らはどうしても破棄しないよう要望したが、私はもう行かないことを既に決心した。同時に、進歩側の輿論、特に文芸界から私に対しての攻撃も激しかった。私の答えは、即ちこうである。『観察』に掲載された「J.マサリークの遺書に擬して」（1947）という一文は、大筋では「中間路線」を信じていないと説明した。そして、もし当時の国民党の状況下で許されれば、自分の盲目を認め、自分は人民側に立っている、と声明を発表した。

『新路』事件は、私の一生の中で忘れ難い出来事である。くどくどしい「中間路線」の破産であると同時に、私の人生転機ともなった。私は目覚めさせられ、岐路から革命路線へ転換することができたのであった。ちょうどその頃、チェコで事件が発生した（潜伏した民主的個人主義者に対する粛清）。お蔭で、私は目を見張って中国の現実を認識できたのであった。

一九四八年六月、私は復旦大学の教職を辞した。

もしも一九四八年の春と夏の『大公報』に掲載された国際論説をめぐって頂ければ、私の書いた記事は、編集者の削除があったものの、やはり私の認識変化があったと見られる。その中で、「馬來亜的陳壘展開了」、及び「法国的大罢工」は、国民党宣伝部から警告を招いた記事であった。

上海の江湾に移った後、近所に李純青同志が住

んでいるので、彼の指導の下で私は、イギリスで受け売りをした愚鈍な思想を自己批判した。それと同時に、積極的に人民側に寄るよう努力した。その頃、楊剛はアメリカから戻り、暫く上海に住んでいたが、その後香港へ去った。

十一月中旬、王芸生、李純青及び私三人は、口実を作って上海を離れた（王は台湾事務所を視察すると偽り、私は辞せずに去った）。我々一行は香港に着いた後、香港版『大公報』を接收し、人民の利益を擁護する新聞を編集するよう努めた。

香港で、喬冠華、林林、夏衍、許滌新、張彦などと接触する他に、幾つかの座談会や学習会に参加した。同時に、『中国文摘』の編集仕事も手伝い、革命雰囲気の中で共産党員は高貴な品格を持っているのを知った。

一九四九年春、上海解放後、『大公報』は私を上海に派遣するのを決めたが、いよいよ香港を離れようとした時、喬冠華は私に北京で国際宣伝工作に参加するよう勧めてくれたので、即座にこの仕事の参加を決めた。一九四九年八月の末、私は『中国文摘』（香港）のメンバーたちと船に搭乗して北京へ向かった。九月六日、青島に着き、十二月北京に到着する。その後、国際新聞局で働き始めた。北京で最初の仕事は、『中国文摘』（香港）を編集する。一九五〇年元日、『人民中国』が刊行された。それ以降、私はずっとこの仕事に携わった。

この一年間、政治理論の文献を勉強する他に、私は主に社会発展史についても学習した。六月よりスタートして思考総括をまとめた。三か月かかった思想総括の中で、私ははじめて自分の歩んだ十年間の人生が誤ったものと反省した。こうして全身まみれの埃も払いのけた。自分の思想状況について、次のように批判的に見る。

私の登り詰めようとした考え及び「中間路線」は、すべて誤った人生観によるものであった。己のために生きようとした立身出世の人生観は、即ち個人主義に基づいたものである。このような人生観は、人民のために奉仕する人生観とは相容れないものであった。革命方向とも全く異なっている。文学においては、不朽なもの——唯美的頹廢主義を追い求め、政治思想においては「中間路線」を求めようとした。このように、立身出世を

念頭に置いた結果、折衷と妥協を好む人生観となり、表面的には人事を繕ったが、その実は原則を曲げてしまった。

私の誤った人生観は歴史的原因がある。一部は経済的要因——幼年時代に頼りもなく、身の安全と保障もなく、面倒を見てくれる人はなく、すべて自分一人で面倒を見ていた。しかも長い間、他人の家の居候になって暮らしていた。それは一面において封建主義の名残でもあった。私は父の死後に生まれた子として、未亡人の母が生きていた頃、虐めや苦しみを嘗め尽くした。自分も早くから「負けん気」で出世しようという願望を持っていた。この願望によって自分は墮落せず、常に登り詰めようと励まされた。別の面から見れば、三十数年間、英米買弁式の自由主義教育を受け、社会に出て勤めていた会社は、政治面で全く気骨のない新聞社であった。その間、七年間、社会民主主義勢力のイギリスで過ごした。こうして、私の青年期に革命方向の芽生えが頓挫したのであった。

一九四八年春から今日に至るまでの学習及び反省を通して、政治面での自由主義は既に清算された。登り詰めようとした願望も、主観的努力と客観的環境により払拭したが——完全に無くなるまで更なる学習が必要なのだ。文芸上においては、まだ「技巧と観点」の残滓が残っているが、感情面において労働者、農民、兵士と結びつくべく、過去を徹底的に清算すべきものであると思う。『大公報』との関係は断ち切れたばかりでなく、胡政之に対する恩返しของ考えも清算された。革命期において『大公報』の反人民の罪を明らかにする一方、私に対する悪影響も清算した。『新路』に関しては、やはり革命の利益に基づいてこの事件を認識すべきだと思い、そして、プロレタリアの立場で考え、人民の眼の中に砂をまき散らす中間派の企みを憎むようになった。

今後、自分の政治的レベルの低さを認識した上で、新聞記事を精読し、真面目に報告に耳を傾け、マルクス・レーニン主義の文献を熟読して自分の欠点を克服すべきだと思う。必ず原則を曲げないことを学び、人民の僕になるよう努力する。

今回の総括により、密かに「思想改造」をしようということの不可能、及び人民の知恵と偉大な

力を十分に示してくれた。今後は人民の中に身を投じて勉強すべく、他人を批判する勇氣及び批判を受け入れる度胸を持って、客観的理性的に批判の武器を用い、これを以て自分の政治的レベルを高め、改善しなければならない。

九、組織参加要望

私は十四歳から既に革命と関わった。出身から言えば、私も貧しい家庭に生まれたが、ただし没落したブルジョワジーの家庭であった。父は清末の手先として地位の低い役人だったし、私は幼い頃からブルジョワジーの意識に染まった。ご飯も碌に食べられず虐められた時、私はいつも革命に憧れた（二十歳以前、私はいつも飢えていた）。しかし、生活が少し安定すると、革命に対する情熱が徐々に減った。このような原則もなく理想もなく、方向も内容もない生活態度を徹底的に否定し、それを無くさなければならない。私はプロレタリアの指導及び組織の下で、革命の人生観を身につけようと決心した。人類大同という最も崇高な理想及び革命事業の上で一個のネジのような役割を果たせるよう努力する。

私の半生を振り返ってみると、立身出世のために登り詰めようとしただけに、困り果てている。世界や中国の前途に対してぼんやりしていて、まるで土の中のミミズのような状態であった。しかし、時には人民のために何かを書こうともした。大学時代に民間人の苦しみを取材しようとする志を持ったが、結果として消極的に苦しみを訴えるに過ぎなかった。一度も輝くような光を出せず、反動勢力に対して指一本さえ触れることもできなかった。この二年間に於いて、過去の自分を冷静に分析したが、その結果、自分は組織生活もなく規律もなく、革命組織の教育も指導も受けなかった。ただ革命の「同伴者」に甘んじていた。

右寄りの道を歩んだことはなかったが、「中間路線」(新路!)は確かに経験した。壁にぶつかって自分を目覚めさせた。それは一本の絶望の道であった。今は漸く分かるようになったが、私の目の前に、たった一本の道、すなわち左の道、マルクス・レーニン主義の道、共産主義の道だけである。この道によってのみ、被圧迫者(植民地であ

れ売春婦であれ農民であれ)が立ち上がることができる。それによって足枷から人民は解放されるに違いない。

私は組織参加を要望しようとする。組織教育の下で、始めて偉大な理想と信念を信じていることができるのである。そして、組織指導の下でこそ、偉大な理想に忠誠を尽くすことができ、再び盲動によって誤った道を間違えることはないと思う。

一九五〇年九月十日

【付録】

蕭乾略年譜 (1910-1999)

顧偉良 訳

1910年 (1歳)

1月27日、北京で漢化したモンゴル族の貧しい家庭に生まれ、名前は蕭柄乾と呼ぶ。父は北京城東直門の番人、蕭乾が生まれる一か月前に亡くなる。

1917年 (6歳)

尼寺にあった私塾に入り、半年経たず退塾。

1921年 (11歳)

崇実小学校に入り、午前中はバイト、午後は勉強。この勉強生活は、崇実中学校卒業まで続く。母呉氏亡くなる。

1926年 (16歳)

中学校卒業後、夏休みを利用して北京北新書局で見習い生として働く。小さな出版社だが、そこから魯迅の『呐喊』『野草』などの小説および週刊誌『語絲』が刊行。蕭乾は、時々自転車では道湾にある魯迅宅まで原稿料を届けに行く。秋、崇実高等部に入学。冬、C.A (共産主義青年団)に秘密参加。崇実学校で互助団を組織する。張作霖の偵察隊に逮捕され、一か月後に保釈出獄、学校に軟禁。

1927年 (17歳)

崇実中学学生会主席に選ばれ、学内誌を編集。

1928年 (18歳)

高等部三年生一学期、学内騒動の首謀者という名目で学校側から除籍。広東汕頭(スワトウ)へ。蕭若萍と改名、角光中学校で国語を教える。

1929年 (19歳)

教え子と恋に陥る、長編小説『夢之谷』は、この体験に基づく。夏、北京に戻り、燕京大学国語研修班に入る。蕭乾と改名。冬、英文科学生楊績(楊剛1905-1957)と知り合う。

1930年 (20歳)

秋、輔仁大学英文科に入学。

1931年 (21歳)

在学中、米国人ウィリアム・アーランと共に“China in Brief”(中国簡報・八期)を編集、中国現代作家の作品を紹介した。在学中、学部長(アイランド系アメリカ神父)の助手を務める。編集関係で作家沈從文と知り合う。

1932年 (22歳)

夏、福州へ。倉前山の英華中学で国語を教える。

1933年 (23歳)

輔仁大学英文科より燕京大学新聞学院に転入。そこで著名な国際ジャーナリスト、エドガー・スノーと出会う。この出会いは、蕭乾の文学生涯に於いて最も大きな影響を与えられた。在学中、楊剛女史と共に、現代中国短篇小説選『活きた中国』(“Living China”,エドガー・スノー編訳)の編集を手伝う。この年、初めての短編小説「蚕」を、『大公報・文芸欄』(沈從文主宰)に発表。

1935年 (25歳)

3月、小説『帰依』を発表。エドガー・スノーの編訳『活きた中国』に収録。6月、燕京大学新聞学院を卒業(25歳)。7月、天津『大公報』社に入社。大公報文芸欄「小公園」(のち「文芸」と改称)編集担当。秋、山東などへ洪水取材。

1936年 (26歳)

3月、上海版『大公報』準備のため、上海に赴く。巴金の紹介で魯迅と会う。4月1日より、北京版と上海版の『大公報・文芸』を編集担当。

1937年 (27歳)

8月、日本軍による激しい上海爆撃のため、『大公報』経営困難に陥り、失業、昆明へ行く。再び『大公報』の招聘により、武漢版の文芸欄を編集担当。

1938年 (28歳)

夏、香港へ、引き続き『大公報・文芸欄』を編集担当。その間、日中戦争に関するルポルタージュを多数執筆。1939年夏、ロンドン大学東方学院より講師招聘状が届く。10月、ロンドン到着。兼『大公報』イギリス駐在特派員。

1942年 (32歳)

夏、ロンドン大学東方学院を辞職、作家フォースターなどの推薦で、ケンブリッジ大学キングス・カレッジに入学、イギリス心理小説を研究。作家E.M.フォースターとの交友関係が始まる。

1943年 (33歳)

『大公報』社長(胡霖)の提案で学業を捨て、戦時記者として欧州戦場へ赴く。自ら訳した英語版小説集“The Spinners of Silk”が刊行。スイス語、ドイツ語の訳もある。

1944年 (34歳)

6月、ロンドンで『大公報』事務所を開設、戦時レポートを重慶へ送る。英文著作“The Dragon Beards Versus Blueprints”(Pilot Press)が刊行。秋、欧州戦場にいる唯一の中国人記者として活躍。

1945年 (35歳)

3月、米軍第七師団と共にライン川へ進軍。5月、アメリカへ国連成立大会に参加。7月、ポツダム会議を取材。10月、ニュルンベルク裁判を取材。

1946年 (36歳)

3月、ロンドンより上海へ。復旦大学英文科教授、新聞学院教授兼任。秋、台湾へ。

1948年 (38歳)

夏、蕭乾の母校ケンブリッジ大学フォースターより、新設

- の「現代中国文学」講義を受け持つよう招聘状が届き、手紙で断る。10月、香港へ。
- 1949年 (39歳)
3月、ケンブリッジ大学キングス・カレッジ中国文学科主任キュスターヴ・ハルーン教授が、自ら九龍の花墟道にある蕭乾の家を訪れ、蕭乾に現代中国文学の講義を受け持つよう招聘した。大学側が家族全員の旅費を負担し、終身教授のポストも約束した。この招聘はエドワード・モーガン・フォスターの好意によるものだったと推察した。蕭乾は色々と考えたあげく、招聘をきっぱり断り、八月、家族と共に「華安丸」に乗って建国前夜の北京へ戻る。フォスターとの文学上の友情が悲劇で終わったため、終生癒されない痛手を負った。
北京到着後、すぐ国際新聞局発足の準備作業に参加。10月、英紙『人民中国』副編集長兼社会グループ組長を任命される。
- 1950年 (40歳)
9月、訪英代表団の秘書として訪英予定だったが、出発前に訪英資格を取り消される。11月、湖南省へ農地改革運動に参加、「土地農民にかえる」を、英紙『人民中国』に連載。のち日本語訳『土地農民にかえる』（蕭乾著、宮崎世民訳、ハト書房、1953）が刊行。
- 1953年 (43歳)
中国作家協会に移動、雑誌『譯文』編集部副主任。
- 1954年 (44歳)
5月、文潔若と結婚。全国翻訳会議に参加。
- 1955年 (45歳)
作家協会へ、もとの生活にもどり、創作活動に専念するよう要請する。
- 1956年 (46歳)
春、作家協会より石炭鉱山での仕事を許可される。他の仕事のため行かなかった。
- 1957年 (47歳)
『人民日報』に「放心・容認・人事工作」などの文章を発表したため、反共産党、反社会主義という罪で「右派分子」と判定された。その後、二十二年間に亘る創作権利が奪われる。
- 1958年 (48歳)
4月、唐山某農場へ強制労働。
- 1961年 (51歳)
6月、強制労働を終え、人民文学出版社翻譯所に戻り、ヘンリー・フィールディング (Henry Fielding) の代表作『トム・ジョーンズ』を共訳。
- 1962年 (52歳)
訳書『リルケ風刺小説選』（人民文学出版社）を刊行。
- 1964年 (54歳)
7月、国务院文化部党委員会より右派のレッテルをはがされたが、待遇は変わらず、以前のままだった。
- 1966年 (56歳)
文化大革命開始。8月、紅衛兵より家族と共にリンチを受け、エドワード・モーガン・フォスターの手紙を百通余り失う。蔵書及び研究資料など全部失う。
9月5日の夜、睡眠薬を吞んで自殺を図ろうとしたが、未遂に終わった。後日、紅衛兵からリンチを受けた義理の母は自殺。
- 1969年 (59歳)
9月、湖北省咸寧文化部所属の“五七”幹部学校へ強制労働。
- 1972年 (62歳)
夏、重労働で心臓病を患う。
- 1973年 (63歳)
1月、病気治療のため北京へ戻る。7月、夫人文潔若は人民文学出版社に復帰する。蕭乾はそのまま北京に留まる。
- 1976年 (66歳)
「四人組」肅清後、人民文学出版社に正式に復帰する。
- 1978年 (68歳)
文学回想録「エドガー・スノーと中国文芸運動」を執筆。
- 1979年 (69歳)
2月、中国作家協会より名誉回復。1957年ブルジョアジー右派分子のレッテルは誤ったものと認める。人民文学出版社顧問と任命される。4月、回想録「地図を持たない旅人」に着手。8月、アイオワ大学を訪問。10月、作家協会第三回理事に選ばれる。11月北京市政治協商会委員。12月、香港大学で講演「新聞と文学の関係」を行う。
- 1980年 (70歳)
1月、香港中文大学で講演「アメリカ旅行記」を行う。6月、文学回想録「一冊の色褪せのアルバム」を発表。人民文学出版社顧問に就任。7月、「ヘレン・スノースくのごとく語りき」を発表。8月、6月、中国人民政治協商会委員に選ばれる。10月、腎臓結石のため入院。12月、手術で左の腎臓結石を摘出。
- 1981年 (71歳)
5月、名誉回復後の散文集「一冊の色褪せのアルバム」が刊行。7月、ウイスコンシン大学より翌年の訪問要請、病気のため断る。8月、左の腎臓を摘出。12月、香港文学研究所より『蕭乾選集』が刊行。
- 1982年 (72歳)
1月、「摯友、益友および畏友巴金」を発表。5月、『楊剛文集』編集完了、人民文学出版社より刊行。12月、四川人民出版社より『蕭乾文集』（全4巻）が刊行。
- 1983年 (73歳)
1月、文潔若と共にシンガポールを訪問。詩人艾青夫妻、作家蕭軍夫妻同行。2月、中国語訳『ベール・ギュント』が四川人民出版社より刊行。8月から10月にかけて、アイオワ大学、ノース・アイオワ大学、カリフォルニア大学サンディエゴ分校などより講演要請で、夫人文潔若と共にアメリカへ。
- 1984年 (74歳)
3月、民主同盟中央常務委員会より文教委員会副主任を任命。4月、中国語訳『トム・ジョーンズ』が人民文学出版社より刊行。アモイ大学新聞伝播学院兼職教授。8月、『フィールディング——イギリス・リアリズム小説の礎』が上海譯文出版社より刊行。8月から9月にかけて、ドイツ連邦国、ノルウェイ、イギリスを訪問。ノルウェイ国王より接見を受ける。オスロ大学東亞研究センターより要請でノルウェイを訪問。イギリスで英国漢学会年會に参加。

1985年（75歳）

1月、夫人文潔若と共にシンガポール、マレーシアを訪問。

1986年（76歳）

6月、『西欧戦場特写選』が新華出版社より刊行。7月、国務院より中央文史館副館長を任命される。8月、夫人文潔若と共にロンドンを訪れ、中国・英国共同撮影テレビドラマ『蕭乾再びイギリスを訪れる』に参加。10月、夫人文潔若と共にアメリカ訪問、ニューヨーク大学などで講演。12月、北京でノルウェイ王国政府勲章を受ける。

1987年（77歳）

1月、香港中文大学および香港大学で講演。11月、巴金文学創作生涯60年展覧会に出席、「要説真話」と題する挨拶をする。

1988年（78歳）

4月、全国人民政治協商会議常務委員会常務委員に選ばれる。7月、氷心文学創作展覧70年展覧会に出席、「能愛才能恨」と題する挨拶をする。8月、馮牧、柯靈らと同行、韓国ソウルで開かれる国際ペン大会に出席。

1989年（79歳）

国務院より中央文史研究館館長を任命される。

1990年（80歳）

8月、夫人文潔若と共に、『ユリシーズ』の中国語訳に着手。

1991年（81歳）

3月、夏衍文学創作生涯60年展覧を参観。9月、ヘレン・スノー「理解と友誼国際文学賞」祝賀会に出席、挨拶。10月、中央文史館成立40周年大会に出席、挨拶の言葉を述べる。

1992年（82歳）

5月、蕭乾文学創作生涯60年展覧に出席。氷心を見舞う。夫人文潔若と共に、それぞれ20種類の訳書を中国翻訳家文書館に寄附する。

7月、エドガー・スノー逝去20周年記念会に参加。10月、中国共産党第十四回大会閉幕式に出席。

11月、『地図を持たない旅人』（上下）、丸山昇監訳、江上幸子、平石淑子訳、花伝社、1992

1993年（83歳）

2月、中国語訳『ユリシーズ』について、カナダ・トロントテレビ局の取材を受ける。

1994年（84歳）

1月、中央テレビ局の取材を受け、巴金について語る。BBC取材を受け、中国語訳『ユリシーズ』について語る。

3月、中央テレビ局の取材を受け、中国語訳『ユリシーズ』について語る。

4月、巴金と20世紀学術シンポジウムに参加、発言。

8月、日本語訳『地図を持たない旅人』の訳者、丸山昇氏が蕭乾宅を訪問。

1995年（85歳）

1月、ポルトガル記者などの訪問を受ける。

2月、BBC取材を受ける。

3月、中国語訳『ユリシーズ』（蕭乾・文潔若共訳、譯林出版社）が刊行。中華人民共和国新聞出版署第二回全国優秀外国文学図書賞一等賞を授与される。

4月、『文史筆記叢書』編集会議出席のため、夫人文潔若と共に上海へ。華東病院で巴金を見舞う。中国現代文学館成立10周年大会に出席。シンポジウム『ユリシーズ』に出席。

5月、イブセン学術シンポジウムに出席。

8月、『氷心全集』刊行座談会に出席。

10月、英国経済誌『経済学家』に、インタビュー記録「ジョイス翻訳——中国の“オデュッセイア”」掲載。

1996年（86歳）

10月18日、北京病院に入院。10月25日退院。

12月、中国作家協会第五回全国代表大会にて、中国作家協会名誉顧問に選ばれる。

1997年（87歳）

1月、統戦部主催の蕭乾87歳誕生日パーティーに出席。

2月、心筋梗塞で北京病院に入院。

8月27日、退院。9月4日、再び入院。

1998年（88歳）

5月、「創作断想」、「私の恩師楊振声」を執筆。

7月、「私は何のために創作する」、「詩と散文」、「人生感懐」を執筆。

12月、散文集『人生百味』後記を執筆。

1999年（89歳）

1月、左半身麻痺。巴金、李濟生に手紙を書く。1月26日、国務院総理朱鎔基より手紙が届き、誕生日および『蕭乾文集』刊行を祝う。1月27日、中国作家協会、中央文史館、中国現代文学館および浙江文芸出版社連合主催の「蕭乾文学創作70周年および蕭乾文集刊行記念会」に、文潔若が代表として出席。

2月5日、混迷状態が続く。2月11日、腎障害及び心臓衰弱のため、午後18時死去。

2月24日、北京八宝山で遺体告別式が行われる。

【参考文献】

『蕭乾年表』（鮑霽編、文潔若増訂）、『未帯地圖の旅人』、江蘇文藝出版社、2010

『蕭乾年表』（文潔若編）、『微笑著離去：憶蕭乾』、遼海出版社、1999

* 蕭乾自伝資料（翻訳・解説）は、日本学術振興会学術研究基金助成（基礎研究C、研究代表者、研究課題番号：24520404、研究課題名：「中国知識人の挫折と信念——蕭乾文学と思想軌跡をめぐって——」、研究期間：平成24年度、25年度、26年度）の一部である。

父の思い出*

蕭 桐 著
Xiao Tong

顧偉良 訳
Gu Weiliang

私は蕭乾の末っ子、北京に生まれました。現在、米国イリノイ州ロックアイランド市にあるオーガスタナ大学 (Augustana College) 芸術学部教授、兼東アジア学部主任を務めています。この度、弘前学院大学で開かれる座談会に少しでも役立てば、誠に光栄に存じます。

父が亡くなってから十三年も経ちました。私は父のイメージを頼りに、彼の思い出を語り、些かの評価を試みます。最も若い頃の記憶から話しましょう。父は私を自転車に載せて、北京牛圈胡同 (北京の横町) の工事中の新しい家を見に行きました。当時私は四歳ぐらい、父が右派というレッテルを貼りつけられたこと、しかも強制労働から北京に戻ったばかりなんて、全然知らなかったのです。こうして、地図を持たない旅人を自称する父によって、私を人生の道へ導いてくれました。その後、その車輪で私の影を乗せて地面に刻んで、中国及び欧米各地に私の足跡を残しました。

父に関して話すことはあまりにも多い。「愛」という言葉で総括できると思います。古い中国、または新しい中国では、それ相応に愛国心を推奨していますが、凡そ愛国心とは、身を処するに等しいものです。これだけは疑わないことです。たとえ父が懐かしんでいた北京の古い街の風貌がそんなに沢山残されていないにしても。父は幼年に母を失い、帰る家もなく、従って格別に家に憧れていました。自ずと引越を通して、数十年の歴史の変遷について語りたがっていたようでした。私は、八十年代初めに米国留学に渡ったまま、国にもどらなかつたのです。このことをめぐって、いつも父と手紙で議論しました。私が思うには、父は幼い頃から愛されることが少なかつたのです。彼の愛国心は、人や物に基づき、特に声、匂い、場所など友人に関する記憶に基づいています。もしかして自分は物事がついた後、世間で味わった人情味は、父の幼い頃よりも少なかつ

たと思います。

父はとにかく国際情勢を知ろうとするのに夢中になりました。文革がまだ終わっていなかつた頃に、彼は布団を被ったまま、BBC、VOA放送をひそかに聞いていました。実に大胆でした。彼はノルウェイの劇作家イブセンに非常に敬服しています。わざわざ私の為に、あまり知られていない宗教劇『ブラン』について説明してくれました。その一幕は、共同墓地で起きた出来事だが、牧師の述べる言葉の中で死者は兵役から逃れる為に指を切断したと触れている。古今東西を問わず、敵前逃亡者、またはわざわざ自分自身を傷つける行為は臆病者と見なされてしまう。しかし、父の説明によると、劇作家の少ない言葉で反戦に挑む無名英雄を描いたのです。

父は、彼自身は決して強い者ではないのを承知しています。若い頃、球技をする時、汗ばんだら、さっさと退場してしまう。しかも仲間の不満を買っても平気でいました。彼は生まれつきながら物事に敏感で、情緒は非常に脆いものでした。若い頃、何回も危険を脱して安全な境地に至ったのです。建国後、慎んでいたにも関わらず、政治の嵐から逃れられなかつたのです。晩年に彼は、いつも自分の一生における愛情生活について書こうと言っていたが、結局、書く勇気がなかつたのです。それに対し、ただお詫びと自省をただけでした。

数十年来、私はいつも一九六六年八月に自ら目撃した一幕を思い出しています。父は、自殺を図って石の階段に倒れたまま、昏迷の中運ばれていったのです。薄汚い黄色い記者の服には泥や埃が塗れて、いつもの元気がすっかりなくなりました。私たちの家も紅衛兵にめちゃめちゃに壊されてしまい、個人の尊厳どころか、壁一面に標語が貼られ、紅衛兵の罵声の中で打ちひしがれました。そして、物事が判らない私たちによって、長年の蔵書、文書や手紙は火に焼かれました。父は絶望しました。家族にも冤罪を及ぼそうかと恐れて、思い切って命を断ち切ろうとしたのです。

あの暗黒な時代を除いては、父は確かに楽観主義者でした。彼は毎日、相声 (xiangsheng, 中国の伝統的な話芸の一つ、日本の漫才に相当する。一人、または二人以上が登場してしゃべる——訳

注)を聞き、友人、特に文学青年と話し合い、交流していました。友達を裏切って害を加えるような行為は絶対しない。普段は学問のしっかりした人、気骨のある作家や芸能人、或いは普通の人々ともよく付き合っていました。高級官僚や身分の高い者とはあまり付き合わなかった。五十年代の末、創作の権利を剥奪された後、父はイギリス、チェコスロバキヤ、カナダの風刺作家の翻訳を通して自分自身を慰めた。八十年代初頭、イブセンの劇作『パール・ギュント』が上演された後、文化大革命の政治運動に対する批判として、時代と個人のために反省及び総括をしたわけです。八十歳になってからも以前の誓約を破って、母と共に四年間もかかって、ジェームズ・ジョイスの「天書」と呼ばれる難解な『ユリシーズ』を翻訳しました。それは、中国のために学術創作視野を切り拓いた壮挙でした。父の文学生涯及び夫婦協同に於いても絶好調に達したとも言えます。父が若い頃、漂泊の中で民族苦難の文学を追い求めていたが、数十年間に亘って「主義」（イデオロギー）の苦しみに嘗められていた彼は、生活を重んじ理論を軽視するジョイスの文学に於ける反教条主義、伝統を破る勇氣及びユーモアたっぷりの文才を、なおさら知ることができたと思います。中国語訳『ユリシーズ』の刊行は、国家開放政策の進歩だったと示しています。父は晩年になっても鋭気が衰えず、文章を書く時、いつも斬新な文体で創作しました。

多くの家では、父親の尊厳を守ろうとしていますが、父は私たち子供との間に平等な交流を交わし、長い手紙を書いたり告示を張り付けたりして、私たちを励ましてくれました。子供を愛する父は、とにかく時間を惜しまず私たちを育ててくれました。溺愛はしなかった。咸寧幹部学校（文革期に強制労働の場所——訳注）の時、私は鉄線を切ろうとした時、ベンチが壊れてしまった。父はそれを見て、子供は力持ちになったと却って喜んだ。私はコブラに噛まれて、びっくり仰天しましたが、父は却って誇りをもって人の前で褒めてくれました。父と同様、私も小動物が好きだったのです。いつも何でも捕ってきて飼っていました。ある日、足を折れた一匹の猫の苦痛を和らげるために、父と私はその猫を地中に埋めました。

父は音楽が好きでした。古い北京の歌の他に、私たちに、美しいメロディの“Long, Long Ago, Green Sleeves, Daisy”などといったアイルランドの民謡やアメリカの作曲家ステフェン・フォースターの歌を教えてくださいました。また、シェークスピアの劇作ハムレットの中のポロニクスが出発の際に息子ラーテスに語った言葉、そして『椿』のジャーモントがバイオレッターに対して愛する子供アルフレドを放棄せよと勧めるセリフを、父はすべて説明してくれました。一九八〇年、私が米国留学の前に父は、私にE.M.フォースターの同性愛題材の小説『モーレス』（Maurice）を読むよう勧めてくれました。それは私に対する布石だったのです。以前、E.M.フォースターはこの本を、信頼できる人にもみ読むのを許可したのです。父もその一人でした。作者の遺言に従って、E.M.フォースターが亡くなってから本は出版されました。父が亡くなった後、母はそれを中国語訳して、父とE.M.フォースターとの間に中断せざるを得なかった友情を全うしたのです。

父が私に与えてくれた奥深い数々の教えは、如何なる人よりも勝っています。しかし、私は最後の十九年の間に、父と共に生活することができませんでした。父親は読むに堪えうる一冊の本だと言われているが、私も同感でした。父の時代、彼の付き合った作家及び彼自身の創作した現代文学の作品によって、留学後にもずっと私の心を惹きつけられました。私が見ている絵、聞いている音楽もみな父の好きなものです。一九八二年、父から届けられた『傅雷家書』の中に、父の言葉も送ってくれました。「桐兒(とんちゃん)、ぜひともこの本を一字一句（一気に読むのではなく）読んで、繰り返し考えなさい。傅雷は立派なお父さんです。彼は私より学問がすぐれて、私よりも時間を惜しまず海外にいる息子に手紙を書いた。今から見れば、彼はもともと世間の子供たちに見せるために発表する用意があったのです。私とは違って、彼は芸術に造詣が深いし、文学才能も私より優れている。これらの手紙は、彼の数十年に亘る読書履歴の心得を含めています。あなたにとっては必ず啓発になるが……」、と。

2012年7月15日
Rock Island, Illinois

*この文は、国際学術シンポジウム「現代中国作家の挫折と信念——蕭乾文学とその時代」(於弘前学院大学、2012年10月12日、日本学術振興会後援)が開かれた際、蕭乾の令息蕭桐氏より寄せられた。ここに敬意を表する次第である。